音楽と自然の呼応は詩のレトリックか？

天理大学国際学部教授
中　純子　*Junko Naka*

音楽の自然への影響力

李白という詩人は、愁いで白くなった髪を「白髪三千丈」とか、高みから流れる滝の雄大さを「銀河の九天より落つ」などと、凡人には表出できないスケールで詠じている。その李白は、笛の音のイメージを、「史郎中欽と黄鶴楼上に笛を吹くを聴く」（『李太白全集』巻二三）という詩中に、「黄鶴楼中　玉笛を吹く、江城五月　梅花落つ」と詠じた。優れた笛の音によって、旧暦五月つまり真夏に梅花が散る、自然を動かすというのである。これは「梅花落」という曲に因んだ詩一流のレトリックと考えられる。実際に梅花が落ちた落ちないの詮索は野暮というものであろう。ほかにも、晩唐の李商隠は「歌舞」（『李義山詩集』巻中）という詩で、「雲を遏めて歌響清く、雪を迴らせて舞腰軽し」と、素晴らしい歌声が雲の動きを止めると詠じた。現実とは異なり詩のなかのことだと言ってしまえば、身も蓋もない。しかし、音楽によって、植物の生育が促進されるとか、音楽が人間以外に与える作用の研究が盛んになってきた昨今、音楽によって自然が動く現象を全くの虚構としていいか、少し立ち止まってみたくなる。

開花を促した玄宗の羯鼓

音楽好きで知られた唐の玄宗は、羯鼓という外来の打楽器をことのほか好んだと言われており、それを演奏したときの故事が残っている。

> 春の二月初め、玄宗は早朝に洗顔をすませた時、前日から降り続いた雨もやっと晴れて、あたりの風景が輝くように麗しかった。小殿内のあずまやのあたりでは、柳や杏がまさに花を咲かせようとしていた。玄宗はそれを見て「このながめに対しては、あれしかないな」とため息をついた。左右に侍していたものは見合って、酒の用意をさせたが、高力士だけは機転を利かして羯鼓を取りにいかせた。玄宗はすぐさま羯鼓を演奏する場をつくることをお命じになり、小殿のあずまやで一曲を思うままに打たれた。その曲は「春光好」と名付けられた。玄宗は心から満足し、柳や杏を見やると、みなすでに花を咲かせていた。玄宗はそれを指さして笑い、宮中の女官や傍に仕える臣下に言った「このことで、わたしは天公と呼ばれてもいいのではないか」と。みなは万歳をとなえた。（嘗遇二月初、詰旦、巾櫛方畢、時宿雨始晴、景色明麗。小殿内亭、柳杏将吐。覩而歎曰、対此景物、豈可不與他判断之乎。左右相目、将命備酒、独高力士遣取羯鼓。上旋命之、臨軒縱擊一曲。曲名春光好。神思自得、及顧柳杏、皆已發拆。指而笑、謂嬪嬙内官曰、此一事、不喚我作天公可乎。皆呼万歳）
>
> （『太平広記』巻205所収の『羯鼓録』）

この話では、音楽に自然が呼応したことを信じているのか、それとも開きかけていた花が偶然開いたということを、楽しんでいるだけなのか、定かではない。ただ自然を思うままにしたことが、天上界の天帝のようだと玄宗が嬉しそうにはしゃいでいることは確かである。このようにして一瞬で「春光好」という曲を作ってしまうところからは、玄宗が羯鼓の曲を百近く作ったというのもあるいは本当かもしれないと思われてくる。『羯鼓録』は、晩唐の南卓という官僚の手によって記されたものである。当時において百年ほど前の玄宗の逸話を記録したのであるが、彼らが優れた音楽の効力をどれだけ信じていたのかはわからない。この話には以下のような続きがある。

> 玄宗は、ほかにも「秋風高」という曲を作った。秋空が澄み切って、雲一つないときに、これを演奏すると、必ず遠くから風がゆっくりと吹いてきて、庭の木が葉をひらひらと落とした。そのすばらしいことは神業のようであった。（又製秋風高。毎至秋空迴澈、纖翳不起、即奏之、必遠風徐来、庭葉徐下。其妙絶入神如此）

さきほど素晴らしい歌声を聞いて雲の動きが止まるという詩の表現を見たが、ここでは風が吹いてくるという。このような自然と音楽の呼応は、実際あったのかどうかはさておくとして、優れた音楽はそのような力をもつと認識されていたのは、事実であろう。

雲を止めた古代の歌手秦青

実は詩のレトリックとして挙げた、雲の動きを止める歌声について、以下のようにその逸話がある。

> 薛談という者が秦青に歌を学んでいた。しかし、秦青の技を究めないうちに、自分ではもうすべて学んだと思って、暇を乞うた。秦青は彼を引き留めなかったが、城外のわかれ道で餞の宴をし、拍子をとりながら悲しく歌うと、その声は林木を振るわせ、その響きは雲の動きを止めた。薛談は謝って秦青のもとに帰ることを願い、一生そのもとを去ると言わなかった。（薛談学謳於秦青。未窮青之技、自謂尽之、遂辞去帰。秦青弗止、餞於郊衢、撫節悲歌、声振林木、響遏行雲。談謝求返、終身不敢言帰）
>
> （『太平広記』巻204所収の『博物志』）

この「響は行雲を遏む」が後世、音楽のもつ素晴らしい力の形容として用いられるようになったのである。『博物志』は、西晉（265～316）において博学で知られた張華の著作であり、当時こうした音楽の力が伝えられていた。

そう考えてみると、李白が、笛の威力によって、真夏の旧暦五月に梅花が散ったというのも、ただ詩のレトリックであるとは言えないような気がしてくる。少なくとも、古代の人々は素晴らしい音楽のもつ自然と呼応する不可思議な力を認めていた。張華の『博物志』は、これに続いて、伝説の歌手である韓娥について記している。歌をうたって食べ物を恵んでもらう生活をしていた韓娥を、町の者が侮辱したところ、韓娥の悲しい歌声でその町の老人子供は涙をながして三日間食べ物が口にできないほどになった。それで韓娥に謝ると、今度は韓娥が別の歌をうたって、それによって老人子供はみな手を打って舞い、自分では止められない状況になった。最終的に町の人々は韓娥を手厚くもてなし、事なきを得た。この話は、ハーメルンの笛吹き男を連想させるようだ。音楽の霊力はもちろんこのように人間にダイレクトに伝わる。しかしながら、この話が先の話と一連のものであるところからも、自然の林木や行雲にも、人間に対して同じように音楽の影響が及ぶと、古代中国では認識されていたことが窺える。